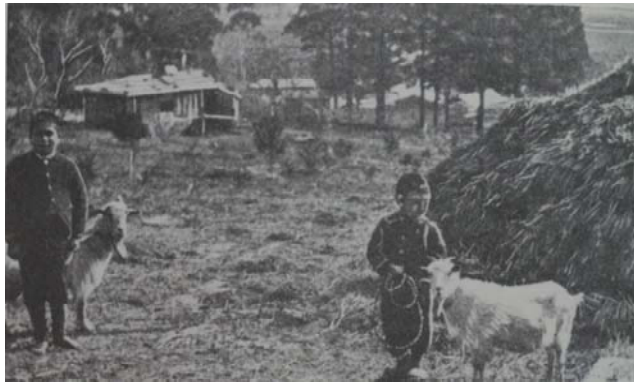


2009.11.14 ホテル法華クラブ函館（函館市本町）

函館と近代アイヌ教育史—谷地頭のアイヌ学校の歴史から—

小川正人（北海道立アイヌ民族文化研究センター）



〔写真〕学校の生徒によるヤギの飼育の風景（撮影年不明）

（仁多見巖『異境の使途 英人ジョン・バチラー伝』北海道新聞社、1991年、71ページより）

〈目次〉

I はじめに

1-1 「函館のアイヌ学校」とは／ 1-2 これまでにわかっていること／ 1-3 今回の講座の内容とねらい

II 学校の沿革：設置から廃止まで

2-1 設立までの経緯とその背景／ 2-2 設立の後、廃止まで／[学校のあった場所：当時の地図と写真をみる]

III 学校のようにと周囲の議論

3-1 生徒数、教科・授業・学校行事、教員のことなど／ 3-2 卒業生／ 3-3 参観者

3-4 キリスト教伝道者による教育活動に対する焦燥と警戒／ 3-5 アイヌの受け止めかた／
[生徒だった方の回想談：録音テープをきく]

IV むすび

4-1 函館のアイヌ学校の位置と意味／ 4-2 函館でアイヌの歴史を考える

〈注〉

・この資料や講座の中で見ていただくパワーポイント（スライド）で引用・転載した資料の中には、現在から見れば好ましくない用語（「土人」「旧土人」など）や表現がありますが、当時の認識を示す記録としてそのままにしてあります。予めご了承ください。

・この資料やパワーポイントに転載した写真・地図は、この講座で使用することを条件に、それぞれの所蔵機関から使用の許可をいただいているものです。

[凡例]

- ・資料の引用に際しては、次のようにしました。

漢数字を算用数字に改めたり、旧字体の漢字や変体仮名を現在一般に用いられる漢字やカタカナ・平仮名に改めた箇所があります。

もとの資料の傍点などの文字の飾りは全て割愛しています。

句読点を補った箇所があります。

漢字のルビはほとんど割愛しましたが、一部、新たにルビを補った箇所もあります。

- ・引用した資料の傍線は、全て発表者（小川）によるものです。
- ・〔 〕内は、発表者（小川）による補足や注記です。）

I はじめに

1-1 「函館のアイヌ学校」とは

※アイヌ学校＝ここでは、アイヌの児童・青少年男女を対象として設置された学校のことを、こう呼ぶことにします。

函館図書館（現函館市中央図書館）の創設者であり郷土史家でもあった岡田健蔵さんが、今から八〇年前に、この学校—聖公会が函館に設立したアイヌ学校—について、下のような文章を書いています。

今日で言えばコラムのような短い文章ではありますが、同校の沿革のあらましをはじめ、卒業生の進路や若干の逸話が押さえられていると思います。文章の冒頭では函館という地域でのアイヌ教育史の認識に関することなど、幾つかの大事な論点にも触れているので、この講座の最初は、この文章を紹介します。

[資料1] 岡田健蔵「日本最初のアイヌ学校と其校長」

アイヌ研究とか旧土人保護とか又旧土人教育など云ふ様な事は我が函館には殆んど没交渉の感があり今日の函館人には夢の様にも思はれるであらうが、明治11年には彼の英人ジョンバチラー氏がアイヌ研究に着手し、遂に幾多のアイヌ語聖書の翻訳蝦和英対訳辞書の刊行、蝦夷今昔物語、アイヌ人與其説話アイヌ語地名考等の研究が発表されたのも我が函館が出发点である。又土人教育に於ても明治25年11月に元町7番地に英人ネトルシップ氏監督教会附属の事業として創設したのが我邦土人教育学校の最初である。其後公園の側に一時移転したが26年に谷地頭（碧血碑下）に校舎を新築して移った。高等尋常の小学課程に準じて其他には羅馬綴や聖書の講義

函館学2009 第7回 函館と近代アイヌ教育史—谷地頭のアイヌ学校の歴史から—
なども加へ校長にはネトルシップ氏がなり教鞭は金岩捨次郎氏が採った。明治31年の在校生が18名で其中には伝導^{ママ}学校に通学のものが4名あったと函館沿革史に書いてある。其廃校年代は不明である（函館区史に記載なし）。此ネトルシップ校長は又我が函館の運動界に忘るべからざる功労者である。氏が当時の中学生に初めて野球競技を教へた事、又ホッケーの（函館人はアヌベスと云ふ）競技を市民に知らせたことなどあるが、当時如何なる事情であったか市内の某新聞がネトルシップの官林盗伐事件と題して数日に批難攻撃の記事を連載したので、函館が厭になり亜米利加に間もなく引揚げた、今は之も昔語である。〔後略〕

（『函館』第3年第11号（通巻第24号、1929年11月。のち岡田健蔵『函館百珍ト函館史実』1956年に収録。現在は函館市のホームページでも読むことができます。）

- ・「日本最初の」というのはちょっとオーバーです。
- ・ですが、この学校が、統計上は近隣にアイヌ人口をほとんど確認できない（[表2]参照）函館の市街地に設置されたものであること、キリスト教伝道者によるアイヌ教育の施設であり、かつその中でも比較的長期間継続したと推測できることなどの点で、近代アイヌ教育史上、着目すべき学校であることは間違いないと思います。

1-2 これまでにわかっていること

- ・近年では『函館市史』の記述が、この学校についての到達点だと思います。

〔資料2〕 『函館市史』の記述

アイヌ学校

キリスト教の布教活動の中では、教育や慈善事業が大きなウエイトをしめているが、函館で布教活動をしていたキリスト教の各派も前述のメソジスト教会をはじめそれぞれに慈善活動をしていた。その中で聖公会はアイヌへの伝道活動に力を入れていた。特に「アイヌの父」といわれた司祭ジョン・バチェラー(John Batchelor)は、当時教育行政から見捨てられていたアイヌのために、幌別の愛隣学校をはじめとした教育施設を全道に開設した。

「札幌には仕事のために一番遠い場所からも、しばしばアイヌがやって来ますが、函館では一年中アイヌを見ることはありません」（仁多見巖訳編『ジョン・バチェラーの手紙』）とバチェラー自身が報告している函館にもアイヌ学校が開設された。これは、幌別の愛隣学校が居留地問題で取り壊し命令を受けたため、その代わりとして25年に元町に開設したもので、同じ聖公会の宣教師で教育者であったネトルシップ(Nettleship)師が校長となった。翌26年には谷地頭に校舎を新築している（『函館沿革史』、ジョン・バチェラー『我が記憶をたどりて』）。32年の同校の概況は、生徒は予科11人・本科4人の15人で、学業は「追々進歩し」、「運動会等の催しなく毎日フットボールの類を課」したということである（河野資料「函館資料三」道図蔵）。

函館学2009 第7回 函館と近代アイヌ教育史―谷地頭のアイヌ学校の歴史から―
また 14 歳以下の子どもを収容する付属育児院も併設されており、当時 14 人の子どもが収容されていた。

この函館のアイヌ学校は、その後も 20 名前後の生徒が在籍した(『函館市史』統計史料編)が、37、8 年頃に廃校となった。

(『函館市史 通説編第 2 巻』、1990 年。第 4 編「箱館から近代都市函館へ」第 10 章「学校教育の発生と展開」) 第 2 節「近代学校教育確立への模索」3「もう一つの学校教育“慈善教育”」)

・この学校を、キリスト教伝道者によるアイヌ教育活動の一環として位置付けている点が、近年の前進の一つだと思います。

1－3 今回の講座の内容とねらい

・学校の歴史について

これまでの研究でも、資料そのものがあまり確認されていないので、大きな進展は望みにくいとは思いますが、これまで調べてみた限りで、少しずつでも明らかにできたことを増やしておきたいと思います。

・学校の位置付けについて

キリスト教伝道者によるアイヌ教育活動は、確かに「慈善」事業的な要素を持っていますが、それだけではない面を押さえておきたいと思います。

一つは、1890 年代には北海道内に 10 箇所近くもの教育・伝道施設を設置するに至ったキリスト教のアイヌ教育活動が行政の側にとっては“脅威”だった点で、このことは函館のアイヌ学校にも何らかの関わり・影響があるはずです。

また、学校に学んだアイヌの生徒、或いは生徒をはるばる函館まで送り出した親たちに焦点を当ててみることで、アイヌを“慈善”の対象とみるような捉え方ではない視点でアイヌ教育の歴史を考えてみたいと思います。

→話の順序はこの逆になります。

つまり、先ず函館のアイヌ学校の設立に至るまでの流れを、アイヌ教育政策の歴史やキリスト教伝道者の活動（特にアイヌに対する伝道を活発に展開した、聖公会のジョン・バチェラーの動き）などを押さえながら説明し、

その上で、この函館のアイヌ学校の歴史を、学校の授業や行事のほか、周囲の見方、この時代のアイヌの受けとめかた、卒業生のことなどにも目を向けて捉えてみようと思います。

・最後に

これは、もしもできれば、という程度のことですが、今回のような函館のアイヌ学校事例を

函館学2009 第7回 函館と近代アイヌ教育史―谷地頭のアイヌ学校の歴史から―
踏まえつつ、岡田健蔵さんの文章の冒頭でも少し触れられている、函館にとっての近代アイヌ
の歴史の捉え方、という問題を少しだけ考えてみたいと思います。
※今回取り上げる函館のアイヌ学校の名称は、資料により微妙に異なります。この講座では「函館の
アイヌ学校」または「谷地頭のアイヌ学校」と呼ぶことにします。

Ⅱ 学校の設立まで

2-1 設立までの経緯とその背景

2-1-1 1890年頃までのアイヌ教育政策のながれ

2-1-2 キリスト教伝道によるアイヌ年頃までのアイヌ教育政策のながれ

2-1-3 ジョン・バチェラーの活動

※ジョン・バチェラー 1854～1944 イギリス・サセックス州アクフィール生まれの
イギリス聖公会宣教師。1877年に北海道に渡って以来、1941年に第二次世界大戦によ
り離日するまで主にアイヌに対する布教活動のほか教育事業などに従事。当初函館に、
のち札幌に住む。来道から間もない1884年に『蝦夷今昔物語』を著し、以後、アイヌ
語・アイヌ文化に関する著作を出版。札幌では市内の学校に通学する生徒のための寄
宿舍「バチラー学園」を設置。（バチェラーの名前のカタナカ表記には「バチラー」「バ
チェラー」の両方が見られますが、ここでは資料上の記述を除き「バチェラー」に統
一します）

・[表1]（関係年表） を使って、流れのおおよそを説明します。

・聖公会が設置したアイヌ教育施設：一覧をスライド（パワーポイント）で紹介します。

・キリスト教のアイヌ伝統活動についての「函館」

→こうしたキリスト教伝道者による活発なアイヌ教育活動、とりわけ、実際にそこに多くのア
イヌの児童が通ったことは当局者らの強い焦燥と警戒につながりました。このことについては
「Ⅲ」で説明します。

[表1]		函館アイヌ学校関係年表
明治の初年（1870年頃）から谷地頭のアイヌ学校が廃止される1910年頃までの近代アイヌ教育史上の主な出来事を中心に、函館のアイヌ学校、ジョン・パチェラーや聖公会の動き、谷地頭に比較的近い渡島地方の公立アイヌ学校である遊楽部学校の沿革などを年表にまとめました。（函館のアイヌ学校に関する記事はゴチックにしています。）		
西暦	明治	こ と が ら
1869	2	・政府が開拓使を設置、「蝦夷地」を「北海道」と改称。
1872	5	・開拓使が東京の開拓使仮学校附属土人教育所に札幌近傍や小樽などのアイヌの青年男女を強制就学させる。
1876	9	・明治天皇が函館に「行幸」（奥羽「巡幸」の帰途に立ち寄る）。
1877	10	・樺太アイヌの強制移住地・対雁（現石狩支庁管内江別市内）にアイヌ児童を対象とした「教育所」設置（翌年「対雁学校」と改称） ・ジョン・パチェラー、香港から函館に移り住む。
1879	12	・ジョン・パチェラー、平取を初めて訪問する。
1880	13	・平取に公立学校設置。
1882	15	・政府が開拓使を廃止、北海道に函館・札幌・根室の三県を置く。
		・函館県がアイヌ教育の「実地調査」のため学務課御用係永田方正を長万部・遊楽部に派遣、永田は遊楽部で学校を開設するに到る。 ・10月、札幌県が文部省に対しアイヌ教育の補助金（年4000円）を申請。
1883	16	・2月 函館・札幌・根室の3県が連名で宮内省に対してアイヌ教育の「基本金」を申請。→3月 宮内省から三県に対し1000円を「下賜」。追って文部省が3000円を下付。 ・この年、函館県は遊楽部のアイヌ学校を公立とする。
1884	17	・ジョン・パチェラー、著書『蝦夷今昔物語』を発行。 ・この年、政府が北千島のアイヌを色丹島に強制移住。
1885	18	・この年、札幌県が学務課御用係遠藤正明を平取学校に派遣、アイヌ児童教授方法の調査に従事させる。
1886	19	・政府が三県を廃止、北海道庁を設置する。 この年、「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率9.2%
1887	20	・北海道庁、「小学校規則」「小学簡易科教則」などを定める。北海道内の公立小学校260校中10校以外を全て簡易科に指定。従来の小学校への補助金を廃止する。
1888	21	・山越内八雲二村戸長役場、遊楽部小学校を「組織変更」し、農業就産を中心とした「取締所」の設置を計画。（この後、1890年頃に休校か） ・聖公会が幌別（現登別市）にアイヌ児童を対象とした小学校「愛隣学校」を開設、地元出身の金成太郎を教員とする。
1891	24	・聖公会が釧路の春採にアイヌ学校を設置。
1892	25	・聖公会が函館の元町にアイヌ学校を設置。ネトルシップを校長とする。 ・前年設立の北海道教育会、「旧土人教育取調委員」を設置。委員に岩谷英太郎、永田方正。 ・12月、北海道庁、道内のアイヌ児童が多数就学する学校の幾つかに経費の補助を始める。八雲の遊楽部ではほぼ全額を補助、シャモ（和人）の児童を八雲小学校に通わせ、遊楽部をアイヌ児童のみの学校とする。同じころ、日高・平取の二風谷、様似の岡二などに学校設置。
1893	26	・聖公会が谷地頭に校舎を新築、元町のアイヌ学校を移転させる。 ・公立遊楽部尋常小学校に対する北海道庁の補助が教員給与のみとなる。再びシャモの児童も収容する。 ・北海道教育会、旧土人教育取調委員による報告書「あいぬ教育ノ方法」を『北海道教育雑誌』第9号に掲載。（のち、岩谷英太郎の名で『東京茗溪会雑誌』第128号にも掲載。） ・この年の「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率 20.7%
1894	27	・北海禁酒会が札幌で演説会を開催、北海道庁理事官白仁武「アイヌ人保護」のほか、ジョン・パチェラー、岩谷英太郎らによる演説が行われる。
1899	32	・3月、「北海道旧土人保護法」公布 ・8月、「私立学校令」公布 ・この年、東本願寺が僧侶奥村円心を色丹島に派遣、ハリストス正教会の信者が圧倒的に多いとされた、色丹の北千島アイヌに対する布教に従事させる。（1901年、ほとんど「成果」を挙げずに離任。）
1900	33	・谷地頭のアイヌ学校、私立学校令に対応して学校の組織を変更。 ・この年、小谷部全一郎の主唱による「北海道旧土人教育会」設立。会頭に二條基弘、幹事に加藤政之助、坪井正五郎、島田三郎らが名を連ねる。札幌にアイヌ児童を対象とした実業補習学校の設置を計画（のち虻田村に場所を変更して設置）。
1901	34	・「旧土人児童教育規程」制定、「北海道旧土人保護法」第9条に基づく小学校の設置開始
1902	35	・この年の「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率 54.6%（初めて50%を超える）。
1905	38	・この年6月24日に谷地頭アイヌ学校が閉鎖されたという。
1906	39	・私立春採尋常小学校、公立となる。
1908	41	・「旧土人児童教育規程」廃止、「特別教育規程」にアイヌ児童の教授課程に関わる規程を統合。
1910	43	・この年の「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率、90%を超える。
出典：小川『近代アイヌ教育制度史研究』（北海道大学図書刊行会、1997年）、北海道『新北海道史年表』（北海道出版企画センター、1989年）をもとに、仁多見巖『異境の使途 英人ジョン・パチラー伝』（北海道新聞社、1991年）、『函館市史 通説編第3巻』、『函館毎日新聞』などを参照して作成しました。		

〔表 2〕 統計にみる、函館の人口及び近隣各郡のアイヌの人口
(1886～1897年)

今回の講座で取り上げる時期の函館の人口と、渡島・檜山地方の各郡のアイヌの人口に関する統計をまとめました。

年		函館市の人口			近隣各郡のアイヌの人口			
西暦	明治	現住	本籍	計	亀田郡	茅部郡	爾志郡	山越郡
1886	19	45,477	29,609	75,086	8	208	2	265
1887	20	46,794	31,105	77,899	—	210	—	267
1888	21	52,403	32,770	85,173	—	206	—	258
1889	22	52,909	33,821	86,730	—	200	8	258
1890	23	55,184	35,199	90,383	—	212	8	247
1891	24	57,943	36,705	94,648	—	208	—	252
1892	25	60,383	37,833	98,216	—	210	8	248
1893	26	63,619	38,791	102,410	／	／	／	／
1894	27	66,333	39,997	106,330	／	／	／	／
1895	28	68,594	41,676	110,270	／	／	／	／
1896	29	70,821	43,208	114,029	—	221	—	235
1897	30	72,968	45,554	118,522	—	221	—	227

凡例と注：

・この時期すでに統計上アイヌの人口がないとされる郡は表に記載していません。函館区も、この時期のアイヌ人口は統計上ではゼロです。

・また、郡の範囲は当時のものです。（例えば、現在は八雲町に含まれる落部は、この表では茅部郡に含まれます。）

・「—」は、統計はあるが数値の記載のないことを示します。（おそらくゼロを意味すると思われます）

・「／」は統計が得られなかったことを示します。

出典：

・函館市の人口は『函館市史 統計史料編』函館市、1988年によります。（同書の典拠は、『函館区史』『函館区役所統計概表』『北海道庁統計書』などです。）

・アイヌの人口はそれぞれの年の『北海道庁統計書』によります。

2-2 設立の後、廃止まで

[学校のあった場所：当時の地図と写真をみる]

2-2-1 元町での開校、谷地頭での校舎建設

- ・1892（明治25）年 元町7番地：地図をスライドで紹介します。
- ・その後 函館公園近くに移転（一時的なもの）
- ・1893（明治26）年 谷地頭（碧血碑下） 校舎を新築し移転：地図と写真をスライドで紹介します。

2-2-2 私立学校令の影響

- ・1899（明治32）年 私立学校令公布
- ・1900（明治33）年 学校の組織変更を実施（？）：後で紹介する[資料5]も参照してください。

2-2-3 学校の廃止

- ・キリスト教伝道活動の一環として設置された学校のほとんどが、ほぼ同じ時期に廃止になっています。
- ・1905（明治38）年6月24日 『函館毎日新聞』によれば、函館のアイヌ学校はこの日をもって「閉鎖」された、とのこと。

Ⅲ 学校の様子と周囲の議論

3-1 生徒数、教科・授業、学校行事、教員のことなど

3-1-1 生徒数など

3-1-2 教科・授業

- ・まとまった記録を得ることはできませんが、以下の[資料3][資料4][資料5]のほか、確認できた限りの数字をスライドで紹介します。

[資料3] 教員ネトルシップの報告から

函館アイヌ学校の報告

函館学2009 第7回 函館と近代アイヌ教育史―谷地頭のアイヌ学校の歴史から―
1月1日現在、在學生 少年16、少女2 計18名

中途退學者 少年2名

中途入學者 少年5名

現在入學中の者 少年19、少女2、計21名

子供たちの出身村と人数は次の通り

幌別 5 敷生 2 平取 2

有珠 5 白糖 5 室蘭 1

釧路 1

合計 21

最年長の生徒は25歳、最年少は4歳です。洗礼を受けている少年12名、少女2名、計14名
です。

〔中略〕

そして私は〔中略〕を除くすべての生徒が独断で、正規の日本人の日曜学校に出席し、日本人信者の親たちから注意を受けたということを聞きました。

〔中略〕日本人の市民たちや他の人はできる方法で学校を援助しています。たとえば釜森氏は独力で、生徒たちとその関係者を彼の蒸気船で半額で遊覧させてくれました。

授業の余暇には生徒たちは伝道の援助に出ています。

〔中略〕

ところで、学校の正常の授業は過去6か月間、学校の建物が移動したり宣教師の住居に付属していたりしたので、かなりさまたげられました。すなわち生徒たちは3月は大部分馬小屋で生活しました。そして再び土地がわれわれに貸与されるのが廃止されたので、即刻建物を土地の外へ移転させねばなりませんでした。すなわち若干の時間が取られました。

〔後略〕

(ネトルシップからイギリスのCMS伝道教会本部宛て報告。1895年7月31日付け。仁多見巖訳編『ジョン・パチェラーの手紙』山本書店、一九六五年)

〔資料4〕 1900（明治33）年1月の新聞記事より

函館土人学校（各種）

校長は英国人ネトルシップ氏、現在の生徒は予科11人本科4人、同校には附属育児院あり、土人の14歳以下の者を入院せしめ、目下14名の院児を収容せり。一昨年末は生徒員数21人にして、現に8人の増加あり。昨年中は入学者7人入院者9人、退学者は4人退院者は1人あり。校舎坪数76坪にして敷地総坪数は900坪あり。運動場4000坪校外三町を隔つるの所に在り、生徒の学業追々進歩し来たる、最も衛生に注意し、別に運動会等の催しなく、毎日フットボールの類を課すと云ふ。

(1900年1月1日付け新聞記事「明治三二年函館教育界の大勢」。新聞名不明、北海道立図書館所蔵河野常吉資料「函館資料 三」所収の記事スクラップ。本資料については『函館市史』より教示を受けました。)

【資料5】 1900年5月の新聞記事より

土人学校の近状

谷地頭なる土人学校の近状を聞くに、昨年八月文部省令新に発布されて以来、同校に於ても従来の組織を改め、土人児童学齢以下の者は小学校制度に依りて之を教養させるを得ざるに至りしも〔中略〕新に育児院なる名の下に日用必須の学科を課することゝし、学齢以上の者に対しては私立学校令に基きて其筋の許可を受けたる私立学校教程を課することゝなせりと。而して現今の生徒は、前記の育児院に教育さるゝ者六名、学齢次の者一六七名あり、合計廿余名にして昨年末に比すれば全数にて数十名を減せし由なるが、其は今春児童中に到底教育の効果を奏し難き者を退校帰郷せしめたに因るものなりと。尚同校にては来五月一日より六月末日までを夏期休暇の季となし、生徒をして帰郷せしむる由。斯く他校と其例を異にするは、農期に際し児童を帰郷せしむることの非常に其父兄を満足せしむるものあるに基くと云ふ。

（「土人学校の近状」『函館毎日新聞』1900年4月28日付け）

3-1-3 学校行事

- ・上記の資料のほか、「クリスマス」の記録や「ピクニック」の写真をスライドで紹介します。

※「ピクニック」の写真は、『アイヌ民族写真・絵画集成 第6巻 歴史』（日本図書センター、1995年）に掲載されているものです。

3-1-4 教員

- ・ネトルシップ
- ・金岩捨次郎

3-2 卒業生

- ・人数や進路などについては、上記の資料などからの、断片的な情報しか得ることができませんでした。
- ・比較的知られているのは、金成マツさんや知里ナミさんです。

3-3 参観者

- ・当時はどここのアイヌ学校でも「視察」「参観」に訪れる人がおり、特に、観光地としても有名になった白老や、都市近郊に位置することになった帯広や旭川では、このような来訪者が多かったことが知られていますが、函館のアイヌ学校も多かったようです。当時の記録をスライドで紹介します。

3-4 キリスト教伝道者による教育活動に対する焦燥と警戒

・こうしたキリスト教伝道者による活発なアイヌ教育活動について、早くから行政の側やシャモ（和人）の教育関係者はかなり意識していたようで、とりわけ、1890年代になって聖公会が各地に学校などを設置し、実際に多くのアイヌの児童が通ったことに対しては、強い焦燥と警戒につながりました。

このことについてはたくさんの記録があります。以下に主なものを紹介します。

【資料6】 『北海道学事新報』第5号（1881年11月）掲載の論説「土人教育」より

其教法ノ如何ハ兎モアレ外国伝教師カ其布教ニ勉強シ智愚ヲ問ハズ何人ニモアレ同等ニ其教法ニ誘導セントスルノ親切ハ誠ニ驚クベクシテ、而シテ僕ハ当道教育者ノ此ノ如キ親切心ニ乏ク土人ヲ見ル猶ホ往時ニ異ナラザルヲ痛嘆セズンバアラズ

（岡野敬胤「土人教育」『北海道学事新報』第5号、1881年11月）

【資料7】 函館・札幌・根室三県から宮内省宛てアイヌ教育「資金」の「下賜」を求める稟請（1883年）

明治維新開拓使創置以此内対雁ノ如キアリ山間ニ散在住居就学ノ便ナキモアリ且他ノ学齡ヲ以テ比例難致候ヘトモ之ヲ教育スルニハ貧人子弟ト一般一切ノ学資ヲ支給セサルヲ得ス其教育ノ方法学資ノ弁給等篤ト勘考仕候処従前ノ経験ニ依ルニ一部落ヲ為スノ地ニ在テハ校舍ヲ設ケ候方便宜ニ付三県適宜ノ地ヘ一ニ校舍設立致度候ヘトモ県庁経費ハ毫モ之ニ充ツルノ余裕無之去述今日ノ勢外国伝教師等年々巡回誘導候ニ付実ニ忽ニスベカラサルノ時會ニ立至リ居リ候

（1883年2月28日付け。『公文類聚』第7編第54巻件名番号27）

【資料8】 北海道教育会「旧土人教育取調委員」の報告書

盲啞学校ハ官立ニ成ル未ダ全国ノ盲啞ヲ教育スルニ足ラズト雖モ模範ヲ示シ唱和ヲ誘フノ効頗ル大ナリ而シテあいぬノ学校未ダ起ラス徒ラニ外人ヲシテ之ニ着手セシム幌別ノ学校ハばつちら一ノ管理スル所ナリ二十余人ノあいぬハ其願使〔いし 顎で指図する、人を自由に使う〕ニ応ゼリ春^{ママ}鳥ノ校舍ハぺいんノ建ツル所ナリ四十余人ノ頑児ハ其化育ヲ受ク之レヲ傍觀シテ知ラズト為スハ国家ノ恥辱ニアラズヤ

（岩谷英太郎・永田方正「あいぬ教育ノ方法」『北海道教育雑誌』第9号、1893年7月）

【資料9】 1890～1900年頃の教育雑誌に見られる議論の例

① アイヌ教育の事たる、邦人の冷淡なるより、其教育の大半は、外人の宗教家に委したるが如し、現に釧路国春取、胆振国白老、函館八^{ママ}頭の如き是なり。今其学校に臨みて親しく見

函館学2009 第7回 函館と近代アイヌ教育史—谷地頭のアイヌ学校の歴史から—
分するに、未だ聖影を奉戴せず、随ふて御誕辰の佳節を祝するが如きことなし。甚だしきは生徒中 天皇陛下を知らざるものあり、豈慨歎に堪ふべけんや。

(渡辺嘉重「アイヌの調査」『北海道教育雑誌』第47号、1896年9月。「茨城教育協会雑誌に寄送せしもの」とあり)

② 耶蘇教の諸派殊に聖公会かアイヌに対して尽さるゝ処よく他宗を圧して独占の有様なり。沙流地方は殊に信者多く、平取村は其本部にしてオホコツナイに伝道師の常任するあり、幌去には夜学を開きて羅馬字と賛美歌とを教ふるアイヌ人イラムカシなるものあり、ヌキベツには同宗の保護を受けてアイヌが其土人を教授し居れり

今は私立学校令もできたれば、余が杞憂は不必要となれる事乍ら、未だ日本の仮名もできざるに羅馬字の教授はいかなる必要がある、或は云ふ羅馬字はアイヌの辨を書するに便利なりと、さもありぬべし、されど仮名にて書するときは和愛洋孰れか通せさらむ、故に余は羅馬字に代ふるに仮名を以てせんことを望みて止ざるなり。

〔中略〕

某学校の生徒村社の祭礼に列す、中に某教信者の子弟あり。牧師某見て以て大に怒り、列中より数名を排して連れ去る。苟も学校の儀式として参列せる場より無断に其生徒を連れ去る頑愚不法の処置たるは勿論なりと雖も、学校儀式を侵害せらるゝ教員其者も亦迂闊ならずや

(含翠迂夫(元室蘭尋常小学校教員・泉致廣の筆名)「愛乃雑話」『北海道教育雑誌』第84号、1900年1月)

3-5 アイヌの受け止めかた

・この時期のアイヌ自身が、このような学校・教育をどう受け止め、どのように対応したのか、といった点については、直接にこのことを教えてくれる資料をなかなか確認できませんが、ここでは、二つの例を紹介し、そこからこの問題を考えてみたいと思います。

〔資料10〕 新冠の鹿戸ヨシさん(1890年生まれ)の回想より

それからこんど、こいうこともあったんだ。函館さ子供等を連れてって、裁縫も教えるし勉強も教えるって役場でまわって、この子供やっておいて覚えさせたほうがいいって言うので、わしが行くことに父親は決めたんだ。そして、迎いに来たっていうもんだから、母親、わしの手ひかえて木原さ行ったり、山の中に行ったりして、二晩も泊まりながら引っぱって歩いて隠したんだ。〔中略〕行くことに父親は決めたもんだから、いないって言うわけにいかないから、わしの代わりにわしの姉をやったんだ。

〔中略〕

それから、わしなんぼかアメリカ学校行つたんだ。その学校は、新冠に別にあつたわけでもないんだけど、どっからか、バチェラーさんと二、三人来て教えるんだ。弟は日本学校なんだ。日本学校は本も自分で買う。半紙も墨も学校で使うものはみんな自分で買うべさ。安いんだけ

函館学2009 第7回 函館と近代アイヌ教育史―谷地頭のアイヌ学校の歴史から―
どね。アメリカ学校ではそのとき流行っている短靴とか靴下くれるんだ。それから、本もみんな
な錢こかかるものがかからないんだ。

〔中略〕

そのアメリカ学校は、時はわからんべさ。だからただ見ていて、なんだか知らんけど書いてあ
ってそれ読むんだ。「ア・ベ・セ・デ・エ・オ・エム・エン…」って〔中略〕日曜になればイ
ェスカニ歌うんだ。〔後略〕

(『エカシとフチ』札幌テレビ放送、一九八三年)

〔資料 1 1〕 帯広で自ら学校を設立した伏根弘三さんの回想

そのお爺さん〔前田正名〕は「函館にアイヌ学校があるのを知って居るか」と言ひます。私は
「知らない」と答へますと、「五六十人来て居るから行って会って見ろ」と言ひます。

〔中略〕

谷地頭にあった学校へ行ってみると、五六十人の同族が集って、それはそれはいゝ声で字を書
いたものを前にして歌って居ます。

〔中略〕

その内にどうして教へるのか等と色々聞いて見ました所、無料でアイヌの勉強したい者を集め
て学問させて居るので、若し入りたいものがあるならば旅費までもやると言ふ話、私はよろこ
んで、

〔中略〕

伏古に帰ってから、私は二人の青年をその学校に入れることにしました。

〔中略〕

私は教育が愈々大切なことを知って、是非学校を立てたいと思つて支庁へ行つた。

〔中略〕

支庁へ行つてこの話をすると「考へては居るがそう言ふお金はない」と言ふ返事。それでも学
校敷地だけは〔中略〕さて肝心の先生が居ません。さがして居た時に丁度看守をして居た某〔十
勝分監の教誨師だった僧侶山県良温を指すと思われる〕が「よしそんなら看守を止めて教えて
やろう」と早速来てくれることになりました。

〔後略〕

(高倉新一郎「伏古村の旧土人ホテネ君談話聞 書」『北海道社会事業』第 51 号、1936 年 7 月。同
様の談話を、吉田巖も聞き取つて記録しています。)

〔生徒だった方の回想談〕

・ 知里ナミさんの回想談を録音したテープが残されていますので、聞いてください。

※これは NHK 札幌放送局が、アイヌの伝統音楽を調査した際に録音した記録の一部です。今回、この講座で聞
いていただくということで、特に許可をいただくことができましたものです。

IV むすび

4-1 函館のアイヌ学校の位置と意味

・函館にあったアイヌ学校が、近代のアイヌ教育の歴史の中で占めた位置や意味について、今の段階で考えられることをまとめてみます。

4-2 函館でアイヌの歴史を考える

・ここまで紹介してきた函館のアイヌ学校の歴史を踏まえて、あらためて、函館からアイヌの歴史、それも、近代以降の歴史をどう認識していくことができるか、ということについて、少しだけですが、今の段階で考えていることをまとめてみます。

〈謝辞など〉

1 今回の講座につながる資料調査や今回の講座での資料の利用に当たって、次の機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

函館市中央図書館 日本聖公会北海教区 桃山学院大学附属図書館
北海道立図書館 北海道大学附属図書館 北海道立文書館
北海道アイヌ協会登別支部

次の方々には、資料の所在などについてご教示をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称は略させていただきます）。

中村一枝 天城英明 竹内渉

2 今回の講座は、北海道立アイヌ民族文化研究センターにおける研究課題「学校と地域の歴史を通した近代アイヌ史の調査研究」による資料調査のほか、次の研究補助金による資料調査の成果の一部です。

日本学術振興会科学研究費補助金 2008 年度奨励研究「近代北海道の旧和人地及び日本海沿岸地方におけるアイヌ教育史に関する基礎的調査研究」（研究代表者：小川正人）

日本学術振興会科学研究費補助金 2006 ～ 2009 年度基盤研究(B)「近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する比較教育文化史的研究」（研究代表者：京都大学大学院准教授 駒込武）

3 今回の講座の内容は、昨年（2008 年）の今ごろに着想し、今年 5 月に北海道教育大学函館校にて開催された第 32 回全国地方教育史学会の大会で発表した内容をもとに、その後の資料調査を加えて再構成したものです。着想のきっかけを与えて下さった方々、5 月の学会で質疑や意見などを下さった方々に感謝します。